

出題された問題に対する評価

評価者：第 102 回国試に出題された 500 問の一つひとつについて、本委員会の委員に、国試として適切な問題であったか否かを評価していただいた。

評価方法：資料 3 に示すように、個々の問題について適切か否かを 5 段階で評価していただき、「不適切」とした問題については、その理由を、「難問(専門医レベル)」、「設問あるいは選択肢に問題がある」、「複数の正解」、「正解なし」、「画像・写真に問題がある」、「その他」の中から選んでいただいた。さらに「その他」が理由の場合には、その内容を具体的に記入していただいた。

回収状況：埼玉医科大学、北里大学、金沢医科大学、横浜市立大学、東京医科歯科大学、山口大学、宮崎大学の 7 大学から回答をいただいた。

集計結果：上記 7 回答をまとめた結果は以下のとおりである。

1. 全 500 題に対する評価

全体として模範的良問と評価された問題は 3.6%、良問とされたのが 26.4%、普通とされたのが 61.6%、少し不適切とされたのが 4.9%、不適切とされたのが 3.7%であった(図 25)。問題の種類別に見ると、良問とされた問題の比率が最も高かったのは D 問題(各論)、不適切とされた問題の比率が最も高かったのが F 問題(必修)であった。第 100 回とよび 101 回の国試問題の評価と比較したのが図 26 である。全問で比べると、第 102 回国試では「不適切」と評価された問題はやや減少した。必修問題に関しては、「良問」、「不適切」とともに減少し、「普通」と評価された問題が増えた。「不適切」とされた理由で最も多かったのが「難問(専門医レベル)」で、A 問題、G 問題、I 問題で特に多かった。必修問題に注目すると、「設問あるいは選択肢に問題がある」との意見が多かった。その他の理由については表 8 に、そのまま記載した。

2. 採点除外等の取り扱いとした問題等について

第 102 回国試では、採点からの除外あるいは複数正解など、特別な取り扱いとされた問題が 5 題あり、必修問題が 3 題、総論と各論が各 1 題であった。この 5 題についての評価をまとめたのが図 27 である。D13、F15、H13 は良問との回答が複数みられた。後 2 者は、厚生労働省のコメントでは「問題としては適切であるが、必修問題としては妥当でない」とされている。問題として適切であることと、必修問題として妥当であることを両立させることの難しさを示すものと思われる。

3. 模範的良問よび不適切との回答があった問題について

模範的良問との回答があった問題の一覧を図 28 に示す。模範的良問との回答が 1 つ以上あった問題は 500 題中 113 題(22.6%)であった。模範的良問との回答が複数よせられた問題は 12 題(2.4%)であった。模範的良問との回答が最も少なかったのは F 問題(必修)、G 問題(総論)であった。

不適切との回答があった問題の一覧を図 29 に示す。不適切との回答が 1 つ以上あった問題は 500 題中 107 題(21.4%)であった。不適切との回答が複数よせられたのは 19 題(3.8%)であり、G 問題(総論)に最も多かった(4 題)。厚生労働省から「複数の正解とされた問題」、「採点除外等の取り扱いとした問題」として公表された問題 5 題は、すべて不適切との回答がよせられた問題であり、この点、厚生労働省の見解と当委員会の委員の意見との一致度は高いといえる。

まとめ：第 102 回の国試では、出題された 500 題のうち「良問」と評価された問題が 30.0%、「良問」と「普通」とを合わせると 91.6%、「不適切」と評価されたのは 4.9%であった。第 101 回の国試は、出題された 500 題のうち「良問」と評価された問題が 31.0%、「良問」と「普通」とを合わせると 87.5%、「不適切」と評価されたのは 10.6%であった。第 100 回の国試では、出題された 530

第 102 回医師国家試験

題のうち「良問」と評価された問題が 28.7%、「良問」と「普通」とを合わせると 88.5%、「不適切」と評価されたのは 10.4%であった。第 102 回の国試では、第 101 回および 100 回の国試と比べて、「良問」と評価された問題の割合はほぼ横ばいであるきに対して、「不適切」と評価された問題の割合は半分以下に減少していた。